

学部医学生の国際交流活動を推進する意義

牧 かずみ

信州大学医学部国際交流室

The Significance to Promote International Exchange of Medical Students

Kazumi MAKI

Office of International Cooperation and Exchange, Shinshu University School of Medicine

Key words : medical students, global medical practitioners, cross-cultural contact, diversity acceptance
医学生, 国際医療人, 異文化接触, 多様性の受容

I はじめに

少子高齢化の中, 高度人材獲得は世界が共有する課題である。欧州では21世紀を迎えた頃に大学進学率40% (Martin Trow の言う大学のマス化) を超えた¹⁾。欧州はそれまでの約20年間, エラスムス計画によって, 高等教育機関の教育課程のアメリカ化という形で統一を図り, 出身国以外の EU 域内諸国への留学を容易にした²⁾。2004年からは欧州ブランドの施策と, 更なる高度人材の獲得を目指して, エラスムス・ムンドゥス計画³⁾により EU 域外諸国との教育交流を広げ, 推進し続けている。これまで当学部が受け入れた臨床実習希望医学生の大半 (37名中24名) も欧州系であった (表1)。伝統的に欧州系の学生のモビリティの高さには定評があったが, 欧州では多様性と移動性は益々推奨されている。

本稿では, グローバルな医療人育成の観点から, 学部医学生の国際交流活動を支援することで, 学部の国際化へつなげる意義について述べたい。

II 我が国の現状

我が国では大学進学率は今や50% (ユニバーサル/グローバル化¹⁾) を超えた。2008年に打ち上げられた大学の国際化戦略事業 (G30) への申請条件には, 学部, 大学院共, 英語だけで卒業できるコースの構築がどれだけできているか, 海外拠点を設け, どれだけネッ

トワークを形成しているか, 外国人スタッフの雇用体制はどれだけ進んでいるかなど, 留学生交流事業への細やかな助成金を獲得するにしても, 組織を上げた国際化の推進が最低条件であることが明白となった。

大学に市場原理が投入され, 高等教育は今やサービスと捉えられている中, 大学はいかにして学生をグローバル人材に育成できるかが問われている。トップの強いリーダーシップ, スタッフの意識がその流れについていくこと, 授業の一環としての取り組みがあること, 財源があること, そして更に, 次世代を育てる意味で, 学部生から意識を育てること, などがグローバル人材育成に掛かる基本スキームとして挙げられることが多い。

III 信州大学の状況

信州大学全体の外国人留学生 (在留資格『留学』保持者) 数の最近の推移は表2のようになっている。厳しい入国管理制度の影響は, 特に学部私費留学生の減少に表れる (2006年以降) が, 信州大学では2008年からの高度人材獲得へ向けた研究大学構想から, 各学部が競って院レベルの留学生獲得に尽力しており, 院レベル留学生の比率は全体的には上がってきた。一方, 国際交流センターでは学部レベルの交換留学生の増加が目覚ましい。従って, 信大全体の学部生と院生の比率は, 現状ではほぼ半々くらいとなっている。

医師という国家資格の取得を目的とする学部教育課程での外国人留学生 (在留資格『留学』を保有し, 「私費外国人留学生試験」を受験する学生) はほぼ皆無である当学部では, 外国人留学生と言えば, 学位取得を目的とした大学院留学生とほぼ同義語であり, そ

別刷請求先: 牧 かずみ 〒390-8621
松本市旭3-1-1 信州大学医学部国際交流室
E-mail: maki@shinshu-u.ac.jp

表1 海外からの医学研修生受け入れ (含む IFMSA)

*2009年4月より, IFMSA 臨床交換留学生を除き, 「外国人研修生」制度開始

*2010年7月受け入れより, IFMSA 臨床交換留学生にも「外国人研修生」身分付与開始

累計 人数	年度	出身国	人数	研修期間	経緯	受け入れ講座	出身校, 他
1, 2	1997	ドイツ	2	16週間	個人応募	内科1	マールブルグ大
3	1998	スイス	1	2カ月	個人応募	内科1	?
4	2004	ドイツ	1	4月~3カ月	教員の個人的 ルート	ポリクリ複数 講座	ハンブルグ大の日本人学生
5		メキシコ	1	3月1カ月	IFMSA	?	グアダハラ大 IFMSA SCOPE 開始
6	2005	フィンランド	1	7月1カ月	IFMSA	麻酔科	タンペレ大
7		オーストリア	1	8月1カ月	IFMSA	神経内科	ウイーン大
8		ネパール	1	8月1カ月	教員の個人的 ルート	移植免疫	カトマンズ大
9		ドイツ	1	10月~5カ月	個人応募, 協定校	外科1	ライプツィヒ大 AIEJ 短期留学 推進制度奨学金支給 特別聴講学生
10	2007	ドイツ	1	8月1カ月	IFMSA	循環器内科	ミュンヘン大
11		フィンランド	1	8月1カ月	IFMSA	スポーツ医学	タンペレ大
12	2008	ドイツ	1	8月1カ月	IFMSA	形成外科	ハイデルベルグ大
13		マルタ	1	8月1カ月	IFMSA	脳神経外科	マルタ大
14, 15		インドネシア	2	2月1カ月	協定校	加齢研, 脳神 経外科	ウダヤナ大 脳外科・病院 講習生扱い
16, 17		ネパール	2	2月1カ月	ネパール友好 団体	呼吸器内科, 脳神経外科	カトマンズ医科大
18	2009	スイス	1	6月1カ月	個人応募	放射線科	チューリッヒ大
19		ドイツ	1	8月1カ月	IFMSA	外科2	ドレスデン工科大
20		イタリア	1	8月1カ月	IFMSA	整形外科	ミラノ大
21		ドイツ	1	8週間 (8月中旬~)	個人応募	外科2	ミュンヘン大
22, 23		インドネシア	2	1月中旬~ 1カ月	協定校	加齢研, 脳神 経外科	ウダヤナ大
24	2010	ドイツ	1	3月末~ 1カ月	IFMSA	脳神経外科	ハノーヴァー大
25		ドイツ	1	16週間 (3月末~)	個人応募	外科1	ミュンヘン大
26		スペイン	1	7月1カ月	IFMSA	脳神経外科	サラゴサ大
27		ドイツ	1	8月1カ月	IFMSA	呼吸器内科	ミュンスター工科大
28, 29		インドネシア	2	2月1カ月	協定校	脳神経外科	ウダヤナ大 外国人研修生
30	2011	フィンランド	1	8月1カ月	IFMSA	形成外科	ヘルシンキ大
31		デンマーク	1	8月1カ月	IFMSA	脳神経外科	オーフス大保健科学部
32	2012	フランス	1	8月1カ月	IFMSA	循環器内科	ポアチエ大
33		ドイツ	1	9月1カ月	個人応募	神経内科	エアランゲン大
34		フランス	1	10月1カ月	IFMSA	外科2	カーン大
35		フィリピン	1	1月~3カ月	個人応募	外科1, 皮膚, 脳外, 整形	ノースウエスタン大, 国籍はタイ
36, 37		インドネシア	2	1月中旬~ 1カ月	協定校	脳神経外科, 外科1	ウダヤナ大

表2 信州大学外国人留学生数の推移

年度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
①学部生	183	181	170	150	136	127	124	125
②院生	164	146	134	129	138	162	156	135
③学部交換留学生	13	15	22	39	34	42	27	57
④研究生	20	22	16	17	22	23	24	20
⑤全学総数	380	364	342	335	330	354	331	337
①+③	196	196	192	189	170	169	151	182
①/⑤	48%	50%	50%	45%	41%	36%	37%	37%
(①+③)/⑤	52%	54%	56%	56%	52%	48%	46%	54%
医学部留学生数の推移	33	27	23	24	25	26	25	31

* 在留資格「留学」を持たない外国人学生や「外国人研修生」は数に含まれない。

の数がにわかに急増することは想像しがたい。その一方で、近年の傾向として、外国人留学生としてはカウントされない、日本人学生と同等資格で入学してくる外国籍あるいは永住権保有学生が毎学年1, 2名存在している。

当学部の基本理念や目標に『国際交流の推進』が謳われて久しい。しかしながら、従来国際交流の推進は講座独自に行われがちで、個人の努力に負うところが多かった。そのため外部的評価には繋がりにくく、せっかくの努力がなかなか報われない状況にあった。現在は『お互いの顔の見える人的交流の推進』と、一歩踏み込んだ表示がされている。目標の明示化は外部評価を受ける上で必須というだけでなく、国際戦略を立てる上で、士気を高めるための効果もあるはずで、部局として具体的な機能強化がなされつつあることは、筆者にも実感されるようになった。

IV 何故、学部レベルの短期推進か

A 異文化間の医療人育成の必要性

「渡航医学 travel medicine」という用語を聞かれたことがあるだろう。Wikipediaには「海外旅行者を対象として健康問題の予防や治療を扱う」分野、とある。海外からの臨床実習希望者の中に、この領域での実習希望者が現れるようになったのである。世界中の人的交流が一般的である現在、自国で診療を行う場合でも異文化の患者と接する機会は減ることはない。実際、地方都市にあるこの大学でも、「医療に掛かる外国人患者やその家族のための通訳ができる外国人留学生はいないか」という附属病院からの問い合わせは

じわじわと増えている。

Yahoo JapanでJapan, clinical, elective, clerkshipなどの用語で検索すると海外の医学部に交じって信州が早い段階でヒットしてくる。信州大学医学部は協定校に限らず、外国人医学生の臨床実習の受け入れを英文で発信している全国でも数少ない大学と言える²⁰⁾。申請書に「情報源はInternet」と記載していない者はいない。そのことはGoogle Analyticsの集計からも明らかで、Internetを通じて、4週間くらいの臨床実習希望の問い合わせは年々増加している(表3)。しかも、最近では、以前では考えられなかった英国、豪州、カナダ、中東、アジア、中国など、あらゆる地域から問い合わせが来るのが特徴的である。海外の医学部が学生達にInternational Electiveを推奨していることは、希望者の理由記述や在籍校の推薦状からも見て取れる。医師という専門職の資格取得を目指した教育課程はどの国でも密に組み立てられており、学生時代の長期留学を遠ざけているが、短期実習なら実現しやすいということもある。しかも、最近では、母国以外の医学部に在籍する外国人医学生からの問い合わせも多く、留学の流動性は2国間に留まっていないのである。異なる医療制度、医学研究レベル、文化的価値観の違いを認識しつつ医療活動にあたることのできる医師の養成が避けて通れないことは、世界で共有されつつあり、他の医学部でも同様の問い合わせが増えているであろうことは想像に難くない。

B 政府の後押し

大学の国際化戦略事業(G30)と連動して、2020年までに留学生30万人を受け入れ、日本人学生30万人を

表3 短期研修（臨床実習）受け入れの問い合わせ件数推移（2012年4月以降）

件数（半期計及び各月計）	問い合わせ時期	問い合わせ学生の在籍機関所在国，国籍，受け入れ希望月など	
11	2012年4月～9月末	ドイツ1件（9月），イラク1件（4月～），レバノン1件（4月～），エジプト1件，英国2件（2月か3月～），中国1件（タイ国籍），グルジア1件，台湾1件，豪州2件（12月～）	
20	4	10月	メキシコ1件，英国3件（2月～，夏）
	4	11月	中国2件，英国1件（5月以降），ザンビア1件（5月以降）
	7	12月	エジプト1件（春か夏），マレーシア6件（8月）
	2	2013年1月	カナダ1件（8月），豪州1件（1月～）
	1	2月	アイルランド1件（7月か8月）
	2	3月	豪州・日本国籍（7，8月），バーレン1件
	2	4月	中国2件（内1件はバングラデシュ国籍）
	4	5月	中国2件（8月，内1件は外国籍），カナダ1件（外国籍），エジプト1件（8月）

派遣するというのが文科省の計画である。日本語学校生も在留資格が「就学」→「留学」となった2010年段階ですら、留学生数は約18万5000人である。達成がかなり難しい数値目標である。各国の『留学生』定義はそれぞれの事情に合わせ一律になっていない^{3)注2)}。そのこともあり、文科省は我が国の定義⁴⁾の検討を続けているが、「教育を目的として国家あるいは領土の境界を越えてきた者」とする OECD のそれに近づけ、ゆるやかにする方向が推察される。

一方、日本人学生の海外留学人数は2004年をピークに減少し、経済発展著しい中国、インド、又韓国と比べても、その差は拡大傾向にある⁵⁾⁶⁾。我が国の経済が新たに成長軌道に乗るためには、創造的で活力ある若い世代の育成が急務と考える政府は、2011年、「グローバル人材育成事業」⁷⁾を発表すると共に、日本学生支援機構（JASSO）による新たな短期留学支援制度（ショートステイ・ショートビジット）を立ち上げ、2011、2012年度、超短期の留学プログラムに参加する学生への奨学金制度を始めた。この制度は2012年、「資金の無駄遣い」であると、民主党政権の「仕分け」に掛かり、2013年の継続が危ぶまれたものの、名称を変更して、実質的には存続された。大学在学中の長期留学が困難な医学分野の学生達にとっては追い風であるだけでなく、留学スタイルが多様化している現状を考へても歓迎すべき政策と捉えられる。当学部保健学科のカーティンプログラム⁸⁾は制度開始より毎年採択されてきたし、幸い、医学科の受け入れ派遣プロ

ラム⁹⁾も本年度採択されたことにより、学生達の視線を海外へ向ける刺激材料になっている。同時に、学部の国際化推進方策として派遣先を増やす機運の向上につながることも期待される。

C 国際化リソースとしての留学生受け入れ

どの国籍であろうと「外国人研修生」¹⁰⁾（図1）は英語ができることを前提に受け入れる。従って、彼らを受け入れるということは、英語による教育を提供することと表裏一体であり、「指導言語は英語」は双方の共通理解なのである。しかも「分野単位」での短期受け入れであるため、比較的受け入れもしやすい。その上、これまで受け入れた研修生達は、日本を選んでやってくるだけあって、ある種日本文化の特異性に高い関心を持っている者が多かった。

世界共通語としての英語表現力を身に着けることはグローバル人材として避けて通れない必須要素であるが、「控え目」が尊ばれる価値観を持った日本人には、特に発信力、表現力を鍛えることが求められている。通信システムの進歩などにより、実体験なくして、すべて経験済みであるかのような意識に陥りがちな、「内向き」と言われる日本の学生達は、留学生達の自立的行動力、英語での発信力に直に接することで、触発されることは多い。

近年の我が国の経済状況などもあって、誰もが海外留学できる条件がそろっている訳ではない。海外からの学生を迎えることは、留学生にとっては日本の医療、医学研究の現状に直接触れる貴重な機会となるばかり

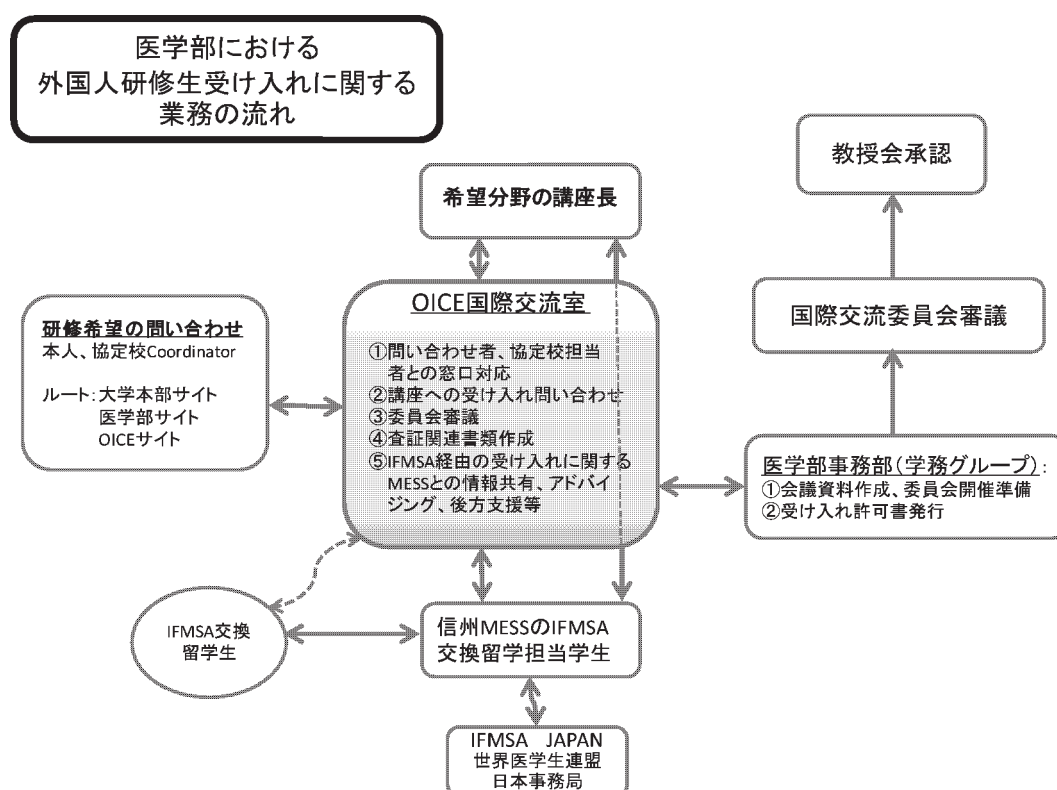


図1 外国人研修生受け入れの流れ

か、日本人学生にとっても、普段の学びの場が「より刺激的な環境」になり、その意義の方がある意味大きい。外国人留学生を国際化のリソースと捉えれば、たとえ短期間であれ、否短期間であるが故に、当方の学生達は注目し、心が外へ向けられ、将来の長期留学、長期研究留学へ接続させる可能性を秘めている。短期留学での出会いがきっかけとなって、修了後も交流が続き、信頼関係が深まれば、将来的には共同研究へと広がる可能性もないとは言えない。

D 異文化接触のインパクト

異文化との接触は、これまで内在化していた価値観、行動、感情に何らかの調整を求められる体験である⁸⁾。調整がうまくいかなくて、一時的に相手文化を拒絶したり、周辺化させたり、あるいは相手文化へ同化してみたりというプロセスの間を行きつ戻りつする⁹⁾。そうして、このような葛藤を経ることで、理解は深化してゆき、自文化を客観視するようになる。客観視できれば、異文化の人に自文化を正しく伝えることができるようになり、ひいては、「違い」に対して、より寛容になれる可能性がある。加賀美¹⁰⁾は、対等な立場での接触、共通目標を目指す協働、制度的支援、表面的より親密な接触などの条件が満たされれば、少なくとも

も多くの研究が、異文化接触は肯定的な効果をもたらす結果となっていることを報告している。

文科省の期待するグローバル人材の要素は以下の3点である。

1. 語学力・コミュニケーション能力
2. 主体性・積極性, チャレンジ精神, 協調性・柔軟性, 責任感・使命感
3. 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

当学部が受け入れる外国人研修生の滞在期間は4週間が主流である。3年生の自主研究演習海外プログラムも、これまでの4週間から原則5週間になった短期派遣プログラムである。このような短期間に語学力が数値的にも向上したとの調査報告もないわけではない¹¹⁾が、対象人数が限られていたり、主観の上達実感であることが多い。しかしながら、大部分が自尊意識や意欲の高まり、積極性やコミュニケーション能力の向上を述べている¹¹⁾¹²⁾。多文化の中で、意欲的な医学生や優れた研究者達と交わり、切磋琢磨するところから得た、新しい発想や自己認識、自文化へのきづきも明らかにみられ、グローバル人材育成の手だてとしての効果は期待される。

V IFMSA

「世界医学生連盟」(以下、IFMSA)¹³⁾という医学生による国際NGOがある。世界で100カ国近い国々の、これまた100を超える医学生団体が加盟している。日本支部IFMSA Japanは、現在60校近い全国の医学部の学生組織と500人を超える個人会員によって構成されている。

海外から臨床実習の受け入れを希望する問い合わせがあれば、関連講座に受け入れ可能かどうかを尋ねることになるが、言葉の問題、宿舎のことなどを考えて、不可となることも多かった。そのような中、ちょうど10年前の2003年、USMLEの勉強会などを実施していたMedical Frontier(略称メドフロ)という学生グループの数人が、信州大学でもIFMSA臨床実習交換留学制度(以下SCOPE)に参加できるよう、医学部へ薦めてほしいと国際交流室を訪れ、自ら道を切り開いた。

SCOPEは受け入れと派遣が抱き合わせになっている交換留学プログラムで、実務・実労はすべて学生によって行われる(図1)。最初の臨床実習生を受け入れ、派遣したのは2004年度であった(表1)。以来このプログラムを通して、毎年2~3名の臨床実習生の受け入れと派遣が学生主体で行われてきた。当学部がこれまでに受け入れた医学生達の半数近くがIFMSA経由の臨床実習生であることは表1からも分かる。学生主体とは言え、外国人学生を受け入れ、研修を実施するのは各講座である。筆者は、学生にとって刺激的な環境づくりを推進し、国際交流への関心を高め、学生達の英語によるコミュニケーション能力の向上を目指しつつ、彼らの自主性を尊重し、控え目な後方支援に徹してきたが、学生達の自発的な活動を後押ししてくれる学部体制があってこそ実現できたIFMSAへの団体加入であり、実習生受け入れであることを学生達にも忘れてほしくない。

VI サークル Medical ESS (MESS)

IFMSA SCOPEによる臨床実習生受け入れの最も大きな困難は、安価な宿泊先の確保である。そのため、ホームステイ先をさがさなければならない。多数派遣するためにはそれと同数を受け入れ、必要な数のホームステイ先を確保しなければならない。受け入れ留学生数を抑えると、当然ながら、留学したくても留学できないメンバーが出てくる。そのため、すべてのメン

バーの活動への参加動機を保持することは容易ではない。立ち上がって3年目くらいから、その先行きには不安が感じられた。そこで、活動の核となる母体をつくることを勧め、2008年、学部サークル・Medical English Speaking Society(以下MESS)が、筆者を顧問として立ち上がった。MESSは国際交流室と連携することで、情報を共有し、IFMSAルート以外で信大を訪れている外国人医学生達との交流、当大学院留学生のチューターリング、信大全体の国際交流活動等に、積極的にかかわってくるようになった。

サークルとなったことはPRできる場を与えられた上、IFMSA交換留学に直結する活動や英語の勉強会を細々としているだけでいいのか、という意識の芽生えに繋がった。核となる学生が支え続けた結果、後身も徐々に育っていった。積極的にプレゼンテーション活動や講演会を展開する中で、部員が50名までに膨らんだ本年は、IFMSA基礎研究交換留学(SCORE)にも新たに参加するなど、名称が実態を十分に表さないと思われるほどに活動内容が広がってきている(図2A-C)。筆者は、MESS=医学系ESSではなく、「MESS=メス」として、臨床実習交換留学への関心、研究留学への関心、国際保健医療への関心、USMLE、Presentation Skill Buildingなどへの関心を持ったグループが、それぞれをSIG(Special Interest Group)として、ゆるやかにつなぎ合って、「国際的視野を持った医療人になること」を目指してゆけばよいのではないかと考えている。そんな中で、「外国人学生と接していると、日本や日本文化について、いろいろ尋ねられるでしょ?そんな時、いかに自分が答えられないかって気付かされない?『日本についてしゃべろう会』はどう?」

と、一言つぶやけば、「日本文化研究会」も立ち上がった。学生達は試行錯誤しながらも、自分たちで歩んでいる。交流に関係した学生達が留学修了後も継続的にネットワークできるFacebookは、これから信州で迎える学生達との間でも活用され、到着前から交流は始まり、研修修了後も繋がりを続けている¹⁶⁾。

MESSを軸とした「多文化へ目を向ける学生達のコミュニティ形成」が出来始めた。筆者は引き続き彼らの主体的な活動を見守り、学部としての日本人学生と留学生のインターフェイス作りのため、彼らと連携してゆきたい。



A



B



C

図2 MESSの活動を表す写真

A：IFMSA 臨床交換留学中のガーナで

B：外国人研修生歓迎会

C：MESSのSIG，ブータン勉強会

Ⅶ ま と め

年齢的にも若い学部留学生は相対的に積極的で、受け入れコミュニティにとってよい刺激を与えてくれる場合が多い。日本人学生達は「一緒に楽しく遊んでいるだけ」と、考えられるかも知れない。しかし、自主的に交流活動を企画実施し、若者の感性でもてなして、対等な立場で接することが肯定的な結果を生み出す要素でもある。チューターとして留学生をサポートする中で、質問攻めにあったり、予想しない出来事に遭遇して、課題解決に迫られることもある。日本人学生が留学生との接触経験を積むことで、学業や生活面での積極性が促され、ひいては大学教育への適応の度合いをも高めていると、中川⁹⁾や神谷と中川¹⁴⁾は報告している。MESSのあるメンバーの発言もそのことを物語っているのではないだろうか。

「大学のカリキュラムが悪いとか、文句をいう前に、与えられた環境の中で、自分自身がどのように取り組んでいくか、が問題だと思う」

価値観の違いに気付かされる異文化接触体験は複眼的な捉え方を醸成し、「肯定的な自己イメージ」「肯定

的な他者イメージ」の形成といった肯定的な結果をもたらす。そうして、臨床現場に於いても、他者たる患者や家族の視点への気づきにつながっていく。それには、彼らの学びを支える教職員の助言、学部をあげての制度的支援、共通目標を目指す協働活動の提供が不可欠と考える。

Ⅷ おわりに

建物の耐震補強工事が終わり、本年度より国際交流室は1階の新しく安全なオフィスへ移転した。益々成長していく学生達に突き動かされ、筆者もこれを機に、異文化の出会いの場を提供しようと7月からTGIF Chat Café (TCC) を月1, 2回“開店”することにした。これまで留学生に関わる日本人スタッフ側の異文化理解の底上げを目指して、それぞれの異文化体験を共有し学び合う場として、「異文化おしゃべりランチ」を昼食時間に試みたが、講座（特に臨床系講座）所属の事務スタッフにはランチタイムの参加は難しいことが分かった。TCCは、まずは学生達（日本人、院生留学生、短期外国人研修生達）がカップ片手のくつろいだ雰囲気の中で、互いのことを知り合う

場となることを目指そうと思う(図3)。

学生が主体的に参加し、母語や文化が異なる学生間のコミュニケーションが活性化されれば、国内にいても「外向き」の場は創生できる。可能なら母国を離れ、異文化環境で実体験を得ることが望まれるが、それも文科省が後押ししてくれている。自主研究演習の海外派遣が現行の教育課程の中に位置付けられたように^{注7)}、短期間で完結できる「臨床実習」受け入れ派遣は教育課程の中に比較的位置付けやすく、実現可能な国際化推進活動と考える。受け入れ身分、単位規定、更には課題として残されている宿泊先の確保等、学部としての受け入れ体制がより一層、具体的に、着実に、進められることを期待するものである。



図3 TCCの1コマ
TCCにて、Albertaについてプレゼン中のカナダ人研修生。

注1) 当学部では全国でも比較的早い段階で英文サイトを導入していたが、Google Analyticsが利用できるようになったのは現サイトを導入した2011年1月31日からである。その分析によれば、当学部英文サイト訪問総数と臨床実習をKey wordに訪問した件数は以下ようになる。()は実際に問い合わせしてきた人数である。

	2011年4月～9月	2011年10月～2012年3月	2012年4月～9月	2012年10月～2013年3月
訪問件数	40件 (NA)	40件 (NA)	82件 (11人)	130件 (20人)
サイト訪問総数	1417件	1677件	1715件	2083件

このほか、検索ワードに「信州」が含まれたものが、それぞれ+7件、+5件、+4件、+5件あった。

注2) 規準となる要素には①国籍・市民権の有無 ②永住権の有無 ③主たる居住地が留学先以外かどうか ④高等教育前の教育を海外で受けたかどうか ⑤留学ビザの有無、などがあるが、どの国も指標としているのは③である。OECDは2006年の報告書から、「留学生 International Student」=「教育を目的として国家あるいは領土の境界を越えてきたもの」としている。

注3) カーティンプログラム：当医学部保健学科が夏期休暇中の3週間、医療英会話力の育成とオーストラリアの医療専門教育体験を目指して、協定校・カーティン大学へ平成12年より派遣している単位認定プログラムである。

注4) 2013年度 JASSO 採択医学科プログラム：派遣は従来からの3年生の「自主研究演習」海外派遣を申請。受け入れはこれまで臨床実習や基礎研究研修を目的として、随時受け入れしてきた「外国人研修生」(学部内身分)をプログラム化し、協定校及び関連機関から派遣される医学生を対象とした4週間の臨床と基礎研究研修プログラムとして申請。受け入れ派遣共採択された。参加学生達には31日までのプログラムに対して各々8万円支給される。

注5) 外国人研修生受け入れの流れは現状では図1のようになっている。

注6) 修了した研修生とMESSのメンバーとの通信はFacebookを通して継続されている。派遣先が受け入れた研修生の国になることもあり、その際は行先で再会が叶ったりもしている。なお、研修修了時に実施しているアンケートの例はExit Questionnaireとして国際交流室(OICE)のサイトにアップもされている。

<http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/medicine/eng/oice/>

注7) Nishigoriらの調査は、海外派遣を教育課程に組み込み、派遣先を関連機関とし、単位認定することによって海外研修に参加する日本人学生が有意に増えたことを伝えている。Nishigori H, Takahashi O, Sugimoto N, Kitamura K, McMahan GT: A national survey of international electives for medical students in Japan: 2009-2010. Med Teach. 34(1): 71-73, 2012 Abstract available at:<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/22250679>

文 献

- 1) 天野郁夫：日本高等教育システムの構造変動：一トロウ理論による比較高等教育論的考察一．教育学研究 76：172-184, 2009
- 2) 牧かずみ：国際教育研究交流の促進へ向けて：欧州の高等教育機関の取り組みから何が学べるか．信州医誌 57：101-109, 2009
- 3) 各国政府，教育機関の統計上の留学生定義： <http://www.kisc.meiji.ac.jp/~yokotam/3%20publications%20rp%20PDF/tokubetukikouronnbunn.pdf#search='%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E7%95%99%E5%AD%A6%E7%94%9F%EF%BD%9C%E5%AE%9A%E7%BE%A9>
- 4) 日本での留学生定義： http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/faq01.html 2. 外国人留学生在籍状況調査 Q1
- 5) 日本から海外への留学生数推移．文科省 HP： http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/01/1315686.htm
- 6) 各国海外派遣留学生数推移： www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san.../sanko1-3.pdf
- 7) グローバル人材： <http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/download.html>
- 8) 渡辺文夫：異文化接触の心理学．川島書店，東京，1995
- 9) 中川かず子：日本人学生と留学生の異文化交流—異文化接触，協働的活動を通じた大学教育への適応と意識変容—．ウェブマガジン「留学交流」13：1-10．2012
- 10) 加賀美常美代：多文化社会の葛藤解決と教育価値観．京都，ナカニシヤ出版，2007
- 11) 宮本美能：超短期プログラムのポテンシャル—A大学におけるオーストラリア語学研修プログラムの一事例考察— 留学交流・指導研究 15：77-87，2012
- 12) 信州大学—Curtin University of Technology 大学間学術交流協定に基づく平成17年度・19年度・20年度夏期海外単位認定プログラム実施報告書（注4の派遣プログラムの終了報告書として担当チームが毎回まとめているもので，学生からのアンケート結果，レポートおよび感想文が含まれている．）
- 13) IFMSA： http://ifmsa.jp/contents/about_ij/
- 14) 神谷順子，中川かず子：異文化接触による相互の意識変容に関する研究—留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果—．北海学園大学学園論集第134号，2007

(H 25. 7. 9 受稿；H 25. 8. 27 受理)